第４講　共通テスト追試験　第２問

第２問

次の文章は、室生犀星「陶古の女人」（一九五六年発表）の一節である。これを読んで、後の問い（問１〜６）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　50）

この信州(注1)の町にも美術商と称する店があって、彼は散歩の折に店の中を覗いて歩いたが、よしなき壺に眼をとめながら何という意地の汚なさであろうと自分でそう思った。見るべくもない陶画(注2)をよく見ようとする、何処までも定見のない自分に惘れていた、彼はこれらのありふれた壺に、ちょっとでも心が惹かれることは、行きずりの女の人に眼を惹かれる美しさによく似ている故をもって、郷愁という名称をつけていた。天保(注3)から明治にかけてのざらにある染付物(注4)や、李朝(注5)後期のちょっとした壺の染付などに、彼はいやしく眼をさらして、思い返して何も買わずに店を立ち去るのであるが、A何ももとめる物も、見るべき物もない折のさびしさはなかなかであった。東京では陶器の店のあるところでは時間をかけて見るべきものもあるが、田舎の町では何も眼にふれてくるものは、なかった。そういう気持できょうも家まで帰って来ると、庭の中に一人の青年紳士が立っていた。服装もきちんとし眼のつかい方にも、この若い男の生い立ちの宜さのほどが見えた。手には相当に大きい尺(注6)もある箱の包をさげていた。かれは初めてお伺いする者だが、ちょっと見ていただきたい物があってお忙しいとは

メモ欄

知りながらお訪ねしたといった。彼はこの青年の眼になにかに飢えているものを感じて、その飢えは金銭にあることがその箱の品物と関聯して直ぐに感じられた。彼は何を見せにお見えになったのか知らんが、僕は何も見たい物なんかないといい、これから仕事にかからなければならないから、些んのちょっとの間だけお会いするといって、客を茶の間に通した。彼はどういう場合にも居留守をつかったことはないし、会えないといって客を突き帰すことをしなかった。二分間でも三分間でも会って非常な速度で用件を聞いてから、いい事なら即答をしてやっていた。そして率直にいま仕事中だからこれだけ会ったのだからお帰りというのがつねである。一人の訪客に女中(注7)やら娘やらが廊下を行ったり来たりして、会うとか会わんとかいう事でごたごたした気分がいやであった。会えば二三分間で済むことであり遠方から来た人も、会ってさえ貰えば素直に帰ってゆくのである。だからきょうの客にも彼は一体何を僕に見てくれというのかと訊くと、客は言下に陶器を一つ見ていただきたいのですといった。陶器にも種類がたくさんにあるが何処の物ですかというと、青磁(注8)でございますといった。彼は客の眼に注意してみたが先刻庭の中で見かけた飢えたものがなくなり、穏かになっていた。どうやら彼の穏かさは箱の中の青磁に原因した落着きにあるらしい、客はむしろ無造作に箱の中からもう一度包んだ絹のきれをほどきはじめた、そして黄いろい絹の包の下から、突然とろりとした濃い乳緑の青磁どくとくの釉調(注9)が、ひろがった。絹のきれが全く除けられてしまうと、そこにはだかのB雲鶴青磁(注10)が肩衝(注11)もなめらかに立っているのを見た。彼は陶器が裸になった羞かしさを見たことがはじめてであった。彼はこの梅瓶(注12)に四羽の鶴の飛び立っているのに見入った。一羽はすでに雲の上に出て

メモ欄

ようやくに疲れて、もう昇るところもない満足げなものに見えた。またの一羽は雲の中からひと呼吸（いき）に飛翔するゆるやかさが、二つならべて伸した長い脚のあたりに、ちからを抜いている状態のものであった。そして第三羽の鶴は白い雲の中から烈（はげ）しい啼（な）き声を発して、遅れまいとして熱っぽい翼際の骨のほてりまでが見え、とさかの黒い立ち毛は低く、蛇の頭のような平たい鋭さを現わしていた。最後の一羽にあるこの鳥の念願のごとき飛翔状態は、とさかと同じ列に両翼の間から伸べられた脚までが、平均された一本の走雲（はしりぐも）のような平明さをもって、はるかな雲の間を目指していた。それらの凡（すべ）ての翼は白くふわふわしていて、最後の一羽のごときは長い脚の爪までが燃えているようであった。彼はこの恐ろしい雲鶴青磁を見とどけた時の寒気（さむけ）が、しばらく背中にもむねからも去らないことを知った。客の青年は穏かな眼の中にたっぷりと構えた自信のようなものを見せて、これは本物でしょうかと取りようによっては、C幾（いく）らかのからかい気分まで見せていった。併（しか）しそれはあまりに驚きが大きかったために、彼がそういう邪推をしてうけとったものかも知れなかった。彼は疑いもなくこれは雲鶴青磁であり逸品であるといい、これはお宅にあったものかと訊くと、終戦後にいろいろ売り払ったなかに、これが一つ最後まで売り残されていた事、売り残されているからには父が就中（なかんずく）、たいせつにしていた物だが、二年前父の死と同時にわすら（注13）れて了（しま）っている事を青年はいったが、その時ふたたびこの若い男の眼に飢えたような例のがつがつしたものが、うかべられた。そして青年は実は私個人の事情でこの青磁を売りたいのですが、時価はどれだけするものか判（わか）らないが私は三万円くらいに売りたいと思っているんです。町の美術商では二万円くらいならというんですが……私は或（あ）る

メモ欄

随筆を読んであなたに買って貰えば余処者(よそもの)の手に渡るよりも嬉しいと思って上(あが)ったのだとかれは言った。彼は二万や三万どころではなく最低二十万円はするものだ、或(ある)いは二十五万円はするものかも知れない、それなのにたった三万円で売ろうとしているのに、彼は例の飢えたような眼に何かを突き当てて見ざるをえないし、当然うけとるべき金を知らずにうけとらないということに、正義をも併せて感じた。君はこの雲鶴梅瓶を君だけの意志で売ろうとなさるか、それとも、先刻、お話のお母上の意志も加(くわ)って居るのかどうかと聞くと、青年は私だけの考えで母はこの話は一(いっ)さい知らないのだといい、若(も)し母が知ってもひどくは咎(とが)めない筈(はず)です、私はいま勤めていて母を見ているし、私のすることで誰も何もいいはしないと彼はいい、若し三万円が無理なら商店の付値(つけね)と私の付値の中間で結構なのです、外の人の手に渡すよりあなたのお手元にあれば、そのことで父が青磁を愛していたおもいも、そこにとどまるような気もして、あんしんしてお預けできる気がするのですと、D<u>その言葉に真率さがあった。</u>文学者なぞ遠くから見ていると、こんな信じ方をされているのかと思った。彼は言った、君は知らないらしいが、実は僕の見るところではこれだけの逸品は、最低二十万円はらくにするものだろう、そしてこの青磁がどんなにやすく見つもっても、十五万円はうけとるべき筈です、決して避暑地なぞで売る物ではなく一流の美術商に手渡しすべき物です、ここまでお話したからには、僕は決して君を騙(だま)すような買い方をする事は出来ない、お父上が買われた時にも相当以上に値のしたものであろうし、三万円で買い落すということは君を欺(だま)すことと同じことになりますと彼は言い、更に或る美術商の人が言ったことばに陶器もすじの通ったものは、地所と同じ率で年々にその価格が

メモ欄

上（注14）騰してゆくそうだが、全くその通りですね、そういう事になれば当然君は市価と同じ価格をうけとらねばならない、とすると僕にはそういう金は持合（もちあわ）せていないし、勢い君は確乎（かっこ）とした美術商に当りをつける必要がある、彼はこういって青年の方に梅瓶をそっとずらせた。青年は彼のいう市価の高い格にぞっとして驚いたらしかったが、唾（つば）をのみ込んでいった。たとえ市価がどうあろうとも一（いっ）たん持参した物であるから、私の申出ではあなたのお心持（こころもち）を添えていただけば、それで沢山なのです、たとえ、その価格がすくないものであっても苦情は申しませんと、真底からそう思っているらしくいったが、彼は当然、価格の判定しているものに対して、人をだますような事は出来ない、東京に信用の（注15）於（お）ける美術商があるからと彼は其処（そこ）に、一通の紹介状を書いて渡した。

客は間もなく立ち去ったが、彼はその後で損をしたような気がし、Eその気持が不愉快だった。しかも青年の持参した雲鶴青磁は、彼の床の間にある梅瓶にくらべられる逸品であり、（注16）再度と手にはいる機会の絶無の物であった。人の物がほしくなるのが愛陶のこころ根であるが、当然彼の手にはいったも同様の物を、まんまと彼自身でそれの（注17）入手を反らしたことが、惜しくもあった。対手（あいて）が承知していたら構わないと思ったものの、やすく手に入れる身（注18）そぼらしさ、多額の金をもうけるような仕打（しうち）を自分の眼に見るいやらしさ、文学を勉強した者のすることでない汚なさ、それらは結局彼にあれはあれで宜かったのだ、自分をいつわることを、一等好きな物を前に置いて、それをそうしなかったことが、誰も知らないことながら心までくさっていないことが、喜ばしかった。F因縁がなくてわが書斎に佇（たたず）むことの出来なかった四羽の鶴は、その

メモ欄

生きた烈しさが日がくれかけても、昼のように皓々(注19)(こうこう)として眼中にあった。

（注）

1　信州――信濃(しなの)国（現在の長野県）の別称。

2　陶画――陶器に描いた絵。

3　天保――江戸時代後期の元号。一八三〇―一八四四年。

4　染付物――藍色の顔料で絵模様を描き、その上に無色のうわぐすりをかけて焼いたもの。うわぐすりとは、素焼きの段階の陶磁器の表面に塗る薬品。加熱すると水の浸透を防ぎ、つやを出す。

5　李朝後期――美術史上の区分で、一八世紀半ばから一九世紀半ばまでの時期を指す。

6　尺――長さの単位。一尺は、約三〇センチメートル。

7　女中――雇われて家事をする女性。当時の呼称。

8　青磁――鉄分を含有した青緑色の陶磁器。

9　釉調――うわぐすりの調子。質感や視覚的効果によって得られる美感のことを指す。

10　雲鶴青磁――朝鮮半島高麗(こうらい)時代の青磁の一種で、白土や赤土を用いて、飛雲と舞鶴との様子を表したもの。

11　肩衝――器物の口から胴につながる部分の張り。

12　梅瓶――口が小さく、上部は丸く張り、下方に向かって緩やかに狭まる形状をした瓶。ここでは、青年が持参した雲鶴青磁のことを指している。

13　わすられて――ここでは「わすれられて」に同じ。

14　上騰――高く上がること。高騰。

15　於ける――ここでは「置ける」に同じ。

16　再度と――ここでは「二度と」に同じ。

17　入手を反らした――手に入れることができなかった、の意。

18　身そぼらしさ――みすぼらしさ。

19　皓々――明るいさま。

メモ欄

問１　傍線部Ａ「何ももとめる物も、見るべき物もない折のさびしさ」とあるが、このときの「彼」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1 。

① 散歩の折に美術商を覗いて意地汚く品物をあさってみても、心を惹かれるものが何も見つからないという現実の中で、東京から離れてしまった我が身を顧みて、言いようのない心細さを感じている。

② 信州の美術商なら掘り出し物があると期待して、ちょっとした品もしつこく眺め回してみたが、結局何も見つけられなかったことで自身の鑑賞眼のなさを思い知り、やるせなく心が晴れないでいる。

③ 骨董に対して節操がない我が身を浅ましいと思いながらも、田舎の町で機会を見つけてはありふれた品をも貪欲に眺め回し、東京に比べて気になるものすらないことがわかって、うら悲しくなっている。

④ 時間をかけて見るべきすぐれた品のある東京の美術商とは異なり、ありふれた品物しかない田舎町での現実を前にして、かえって遠く離れた故郷を思い出し、しみじみと恋しく懐かしくなっている。

⑤ どこへ行っても求めるものに出会えず、通りすがりに覗く田舎の店の品物にまで執念深く眼を向けた自分のさもしさを認め、陶器への過剰な思い入れを続けることに、切ないほどの空虚さを感じている。

問2　傍線部B「雲鶴青磁」をめぐる表現を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 2 。

① 37行目「熱っぽい翼際の骨のほてり」、38行目「平たい鋭さ」といった感覚的な言葉を用いて鶴が生き生きと描写され、陶器を見た時の「彼」の興奮がありありと表現されている。

② 32行目「陶器が裸になった」、41行目「爪までが燃えているよう」など陶器から受ける印象を比喩で描き出し、高級な陶器が「彼」の視点を通じて卑俗なもののように表現されている。

③ 33行目「見入った」、42行目「見とどけた」など「彼」の見る動作が繰り返し描写され、陶器に描かれている鶴の動きを分析しようとする「彼」の冷静沈着な態度が表現されている。

④ 30行目「とろりと」、41行目「ふわふわして」という擬態語を用いて陶器に卑近な印象を持たせ、この陶器の穏やかなたたずまいに対して「彼」の感じた慕わしさが間接的に表現されている。

⑤ 37行目「黒い立ち毛」、41行目「翼は白く」など陰影を強調しながらも他の色をあえて用いないことで、かえって陶器の色鮮やかさに目を奪われている「彼」の様子が表現されている。

問３　傍線部Ｃ「幾らかのからかい気分まで見せていった」について、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i)「彼」が「からかい」として受け取った内容の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **3** 。

① 自分の陶器に対する愛情の強さを冷やかされていると感じた。
② 人物や陶器を見きわめる自らの洞察力が疑われていると感じた。
③ 陶器を見て自分が態度を変えたことを軽蔑されていると感じた。
④ 自分が陶器におののいているさまを面白がられていると感じた。
⑤ 自分が陶器の価値を適切に見定められるかを試されていると感じた。

(ii)「からかい気分」を感じ取った「彼」の心情の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **4** 。

① 「彼」は青磁の価値にうろたえ、態度と裏腹の発言をした青年が盗品を持参したのではないかといぶかしんだ。
② 「彼」は青磁の素晴らしさに動転し、軽妙さを見せた青年が自分をだまそうとしているのではないかと憶測した。
③ 「彼」は青磁の価値に怖じ気づき、穏やかな表情を浮かべる青年が陶器を見極める眼を持っていると誤解した。
④ 「彼」は青磁の素晴らしさに圧倒され、軽薄な態度を取る青年が自分を見下しているのではないかと怪しんだ。
⑤ 「彼」は青磁の素晴らしさに仰天し、余裕を感じさせる青年が陶器の真価を知っているのではないかと勘繰った。

問４　傍線部Ｄ「その言葉に真率さがあった」とあるが、このときの青年について「彼」はどのように受け止めているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 5 。

① 父の遺品を売ることに心を痛めているが、せめて陶器に理解のある人物に託すことで父の思い出を守ろうとするところに、最後まで可能性を追い求める青年の懸命さがあると受け止めている。

② 父同様に陶器を愛する人物であれば、市価よりも高い値段で青磁を買い取ってくれるだろうと期待するところに、文学者の審美眼に対して多大な信頼を寄せる青年の誠実さがあると受け止めている。

③ 父が愛した青磁の売却に際して母の意向を確認していないものの、陶器への態度が父と重なる人物を交渉相手に選ぶところに、両親への愛情を貫こうとする青年の一途さがあると受け止めている。

④ 経済的な問題があるものの、少しでも高く売り払うことよりも自分が見込んだ人物に陶器を手渡すことを優先しようとするところに、意志を貫こうとする青年の実直さがあると受け止めている。

⑤ いたしかたなく形見の青磁を手放そうとするが、適切な価格で売り渡すよりも自分が見出した人物に何としても手渡そうとするところに、生真面目な青年のかたくなさがあると受け止めている。

問５　傍線部Ｅ「その気持が不愉快だった」とあるが、「彼」がそのように感じた理由として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 「彼」に信頼を寄せる青年の態度に接し、東京の美術商を紹介することで誠実さを見せたものの、逸品を安価で入手する機会を逃して後悔した自分のいやしさを腹立たしく思ったから。

② 随筆を読んで父の遺品を託す相手が「彼」以外にないと信じ、初対面でも臆することなく来訪した青年の熱烈さに触れ、その期待に応えられなかった自分の狭量さにいらだちを感じたから。

③ 日々の生活苦を解消するため、父の遺品を自宅から独断で持ち出した青年の焦燥感に圧倒されるように、より高値を付ける美術商を紹介し手を引いてしまった自分の小心さに気が滅入ったから。

④ たまたま読んだ随筆だけを手がかりに、唐突に「彼」を訪ねてきた青年の大胆さを前に、逸品を入手する機会を前にしてそれに手を出す勇気を持てなかった自分の臆病さに嫌悪感を抱いたから。

⑤ 父の遺品の価値を確かめるために、「彼」の顔色をひそかに観察していた青年の態度に比べて、品物の素晴らしさに感動するあまり陶器の価値を正直に教えてしまった自分の単純さに落胆したから。

問６　傍線部Ｆ「因縁がなくてわが書斎に佇むことの出来なかった四羽の鶴は、その生きた烈しさが日がくれかけても、昼のように皓々として眼中にあった。」について、壺は青年が持ち帰ったにもかかわらず「四羽の鶴」が「眼中にあった」とはどういうことか。ＡさんとＢさんは、**【資料】**を用いつつ教師と一緒に話し合いを通して考えることにした。次に示す**【資料】**と**【話し合いの様子】**について、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

【資料】

　私は又異なる例を挙げよう。この世に蒐集家と呼ばれている人は多い。併し有体に云って全幅的に頭の下る蒐集に出逢ったためしがない。中には実に珍妙なのがある。例えば猫に因んだものなら何なりと集める人がある。そういう蒐集はどうあっても価値の大きなものとはならない。なぜなのか。猫を現したものだという「こと」に興味が集注(注1)されて、それがどんな品物であるかは問わなくなるからである。だから二目と見られぬようなくだらぬものまで集める。質よりも量なのだから、特に珍らしい品に随喜して了う。併しそれは珍らしい「こと」への興味で、それが美しい「もの」か醜い「もの」かは別に問わない。美しいものが中にあれば、それは只偶然にあるというに過ぎない。そういう蒐集は質的に選練(注2)される見込みはない。

　併しこんな愚かな蒐集を例に挙げる要はないかも知れぬ。もっと進んだ所謂「美術品」の蒐集に就いて一言する方がよい。忌憚なく云って、真に質のよい美術品の蒐集がこの世にどれだけあるのであろうか。筋の通った蒐集が少いのは、やはり集める「こと」、自分のものにする「こと」、自慢する「こと」等に余計魅力があるからなのであろう。而も標準は大概、有名なものである「こと」、時には高価なものである「こと」でさえある。「もの」を見るより、「こと」で購う。「物」をじかに見ているなら、集める物に筋が通る筈である。いつも玉石が混合して了うのは、蒐集する「こと」が先だって了うからだと思える。欲が先故、眼が曇るのだとも云える。蒐集家には明るい人が少く、何かいやな性質がつきまとう。併し「もの」に真の悦びがあったら、明るくなる筈である。悦びを人と共に分つことが多くなる筈である。蒐集家は「こと」への犠牲になってはいけない。「もの」へのよき選択者であり創作家でなけれ

ばいけない。蒐集家には不思議なくらい、正しく選ぶ人が少い。

柳宗悦（やなぎむねよし）「『もの』と『こと』」（『工藝（こうげい）』一九三九年二月）の一部。なお、原文の仮名遣いを改めてある。

（注）1　集注――「集中」に同じ。
2　選練――「洗練」に同じ。

【話し合いの様子】

教　師――**【資料】**の二重傍線部には「蒐集家は『こと』への犠牲になってはいけない。」とあります。ここでは、どういうことが批判されているのか、考えてみましょう。

Aさん――批判されているのは「猫を現したもの」なら何でも集めてしまうような「蒐集」のあり方です。

Bさん――このような「蒐集」が批判されるのは、それが　Ⅰ　だと捉えられているからではないでしょうか。

Aさん――そうだとすると、二重傍線部の直後で述べられている「正しく選ぶ」態度とは、「こと」にとらわれることなく「もの」を見ようとする態度、と言い換えられそうです。

教　師――**【資料】**の中で述べられていた、「蒐集家」と「もの」との望ましい関係について把握することができました。では、この内容を踏まえると、青年の持参した陶器に対する「彼」の態度について、どのように説明できるでしょうか。

Bさん――青年が立ち去った後、その場にないはずの壺の絵が「眼中にあった」とされていることが重要ですね。結果として壺は手元に残らなかったのに、壺の与えた強い印象が「彼」の中に残ったということだと思います。

Aさん――つまり、このときの「彼」は、　Ⅱ　のですね。だから、その場にない壺の絵が「眼中にあった」という表現になるのではないでしょうか。

教　師――**【資料】**とあわせて考えることで、「もの」と真摯に向き合う「蒐集家」としての「彼」について、理解を深めることができたようです。

（ｉ）空欄 **Ⅰ** に入る発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **7** 。

① 多くの品を集めることにとらわれて、美という観点を見失うこと
② 美しいかどうかにこだわりすぎて、関心の幅を狭めてしまうこと
③ 趣味の世界に閉じこもることで、他者との交流が失われること
④ 偶然の機会に期待して、対象との出会いを受動的に待つこと
⑤ 質も量も追い求めた結果、蒐集する喜びが感じられなくなること

（ⅱ）空欄 **Ⅱ** に入る発言として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① 「もの」に対する強い関心に引きずられ、「こと」への執着がいっそう強められた
② 入手するという「こと」を優先しなかったからこそ、「もの」の本質をとらえられた
③ 貴重である「こと」にこだわり続けたことで、「もの」に対する認識を深められた
④ 「もの」への執着から解放されても、所有する「こと」は諦められなかった
⑤ 所有する「こと」の困難に直面したために、「もの」から目を背けることになった

■ 共通テスト追試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第２問（50）	1	1	3	6
	2	2	1	6
	3	3	5	6
		4	5	6
	4	5	4	7
	5	6	1	7
	6	7	1	6
		8	2	6